

土手の上から見る川面は、夏の強い陽差しを浴びてきらきらと輝いていた。タカシの赤いバイクは、その美しい光景を楽しみながら、ゆっくりと進んだ。後ろに乗ったミノリも眺めに見入っている。

「きれいな所ね。あの滝のようなのは何？」

鱗みたいな石積みの上を、増水した水が白いしぶきをたてて流れ落ちている。

「堰だ。あれの上を鮎が遡上する」

タカシはバイクを止めて、ヘルメット越しに言った。

小さい頃に水遊びをしたなつかしい場所が、なんの変わりもなく眼下に広がることに安堵する。しかし二年半ぶりになる帰郷の目的を思い出すと、急に重苦しい気分になった。

祖父が、もうじき死ぬ。鮎を捕るのを教えてくれたのも、川漁師をしていた祖父だった。あんなに元気だったのに、もうすぐこの世からいなくなる。高齢とはいえ、漁や農作業で鍛えた体は固く引き締まり、浅黒い肌は鋼のようだった。

何かの間違いであって欲しい。祖父が生涯の仕事場として愛した川を見ながら強く願った。

川沿いを河口まで下る。潮のにおいが混じる風が、汗で濡れたTシャツを乾かした。

実家には寄らずに、そのまま大学病院の入院病棟に向かった。気持ちばかり焦っている。

巨大な病院の駐輪場にバイクを止め、エレベーターに飛び乗った。病室のドアを開けると、二回りも小さくなった祖父の姿がそこにあった。閉じていた目を開けて、こちらを見る。

「ああ、来てくれたんか。わざわざええのに」

力無い笑みが、病状が思わしくないことを伝える。ベッドには様々な医療機器が備えられている。そのうちのひとつが、突然無機質な音をたてた。一分もしないうちに若い看護師がノックもなく飛んできて、点滴の機械を調節した。

「あら、お孫さんかしら？遠くから来てくださったんですね。あなたのことをお待ちしてたんですよ」

たいして変わらない歳に見える看護師が、妙に大人びた口調で言った。祖父は、いくぶん恥ずかしそうに俯いた。

急にタカシは言葉にならない激情を胸の内に溢れさせながら、瞼

の裏を熱くして涙をこらえた。この人が自分を育ててくれたのだ。温かい目で見守り、いつも一緒にいてくれた。この人のおかげで、子供が当然与えられるべき愛情に飢えることはなかった。

「よかったね、カナメさん」

看護師は祖父のことを親しげに名前と呼んだ。脈をとったり体温計を見たり、てきぱきと手を動かす。

「こんにちは、ミノリです。お見舞したいと思って、くつついて来ちゃいました」

タカシの背中からミノリがひよっこりと顔を出し、無邪気な声で挨拶した。

「彼女かい？こんな姿でごめんなあ。どうしても先生が家に帰してくれんのよ」白くなつた頭を搔く。

「夕食はできるだけたくさん食べてくださいね、また後で見に来ますから」

明るい声で看護師は言い、お辞儀をして出て行った。すれ違いざま、ふわりと清潔な石鹸のにおいがした。祖父の置かれている状況に満足する一方で、あらためて重病を意識した。

「ひとつも、メシが喉をとらんよ」

運ばれてきた夕食を睨みながら、箸を取ろうともしない。

ベッドの脇の長椅子に、ミノリと並んで腰を下ろした。堰の見える川沿いを、バイクで走つたことを話した。

「そうか、バイクに乗っているのか。ワシも昔乗っていたよ。あれは気持ちええな。どこにでもいける」

どこにでも、と独り言のように繰り返す。祖父が乗っていたバイクについて聞きたかった。

「なあに、ポンコツよ」

はにかみながら、ホンダCD250の話をしてくれた。昔若い頃は市場で働いていたのだという。三人乗りして荷物を山ほど括りつけ、元気に走つたと笑う。

それから川や漁の話になった。かつて、釣り上げた鮎や突いたウナギを河原で焼いて食つた。石の上で塩の焦げるにおいが蘇る。つい数年前のことが、まるで昔話のようだった。

「ダムができてから、鮎はすっかりとれんようになってしまつた」寂しそうに笑う。やがて、祖父は何かを思い出したように黙り込み、目を閉じたまま動かなくなつた。

具合が悪いわけでなさそうだ。静かな呼吸でわかる。やっと見開いた目が深い哀しみをたたえてタカシを見つめる。やがてしわがれた声が吐き出された。

「おまえに頼みがある」

落ち窪んだ眼の光りに威圧された。

わずか一週間だった。散りゆく命のはかなさを嘆く暇もなかった。闇夜を照らす灯火が、音もたてずに消えた。

これで家族と呼べる者は、ヤスシという名の父親だけになった。大学入学以来、この帰郷まで一度も会っていないかった。意識的に避けてきた。

数少ない親戚を呼んで、身内だけの葬式を出した。ミノリはどこから調達してきたのか、黒い衣服に着替えている。手伝いの友人として、さまざまな雑用をこなしてくれた。

祖父と父、タカシの三人で暮らしてきた。タカシがもの心つく前に、母親は家を出て行った。理由は長い間知らされなかった。母親の面影はおぼろにしかない。

ヤスシは寡黙な男だった。仕事は税理士事務所の職員をしていた。早朝出勤して家族が寝静まった頃、帰宅する。

この父に対する情愛の念が育たなかったのは、まったくコミュニケーションの欠如によるものだった。手が届きそうなどころにいるのに、抱き取って語りかけるをしない。そっと我が子を観察している。その目には意味不明な遠慮と哀しみが縋い交ぜに浮かんでいた。家事は祖父がすべてを賄った。献身的に息子と幼い孫の世話を焼いた。

いびつな家族だったが、不足を感じたことはなかった。祖父の深い愛情に包まれていた。父の経済力が家計を強固に支えた。

しかし高校生になった頃から、タカシは父親に強く反発するようになった。苛立ちがどこから来るのかわからなかった。

その父とともに、祖父を送った。葬祭場の煙突から立ちのぼる白い煙を二人で見ている。

「煙草にやられたな」

タカシが吸っている煙草を眺めながら、ヤスシが言った。祖父は強度の愛煙家だった。両切りのピースを一日に一缶空けた。

「いつか自分の体に復讐される。こんなにも一生懸命尽くしたのに、煙草なんかうんざりするほど吸いやがってってな」

肺に発生した極端に進行の速い癌細胞は、死に神のように祖父を引きずり込んだ。自らの体をあつという間に喰い殺してしまった。

「人生の最後の一番いい時間を十年も無くしてしまった」
鼻をぐずつかせながら呟く。

「ほんとうに、あと十年くらいは生きていて欲しかった」

たなびく白い煙が夏のぼやけた青空に溶け込んでいく。タカシは吸っていた煙草を靴先で踏みにじった。

慌ただしい時間が過ぎた。祖父の残した頼み事が、骨壺の中で冷えていく骨片のように、胸の中でちりちり音をたてていた。

「あつた。これに間違いない」

埃まみれの小さな箱を、倉庫の棚の上から取り出した。金属製の小さな取っ手をつまんで鼻先にぶら下げる。

十五センチ四方くらいの木箱だった。中が見える外箱と三段に分かれた内箱でできている。スライド式の前蓋を上げて、緑、白、赤の派手な彩色が施された内箱を抜き出した。

「何それ？」

薄暗く暑い倉庫の中を、ミノリといっしょに半時間あまりも這いずり回ったのだ。

「遊山箱っていうんだ。花見のときに使う弁当箱さ」

「きれい、イタリア国旗みたい」

指先で埃を拭いながら中を調べる。セピア色に変色した分厚い手紙が一通出てきた。

「これを届ければいいんだな」

「そうみたいね、ミスターポストマン」

「赤いバイクだしな」
ホンダCB400SFを手に入れるために、タカシはありとあらゆるバイトをした。

夜中のガソリンスタンド勤務が明けてアパートまでの帰り道、公園のベンチで夜を過ごしたミノリと出会った。行くところがないのならアパートに來ないかと誘った。

奇跡のような邂逅であった。タカシはバイクと恋人の両方をほぼ同時に手に入れたのだった。

「なにをしている？」

野太い声をして、倉庫の錠戸が開いた。眩しい光の中に仁王立ちしたヤスシの姿があつた。しまったと思つたが遅かつた。

「なんだ、それは？」

手紙を隠そうとしたが遅い。ヤスシは珍しく強い興味を示した。これまでどんな出来事にも、消極的な関与しか求めなかつたのに。やむおえず祖父の頼み事について話した。ヤスシの目の色が急にきらきらと輝きだした。

赤いCB400SFの横に置かれてある物を見て心底驚いた。黒い大きなバイクがそこにある。無骨なカウリングから左右に大きく張り出したエンジンヘッドが、周囲を威圧していた。

「九十年式のBMWWR100RSだ。俺もおまえたちといっしょに行くよ」

ヤスシが白い歯を見せて笑つた。笑う顔を始めて見た。

「いっしょに？バイクなんて乗つたことあるのかよ」

軍用にも使われたドイツ製のオートバイに見とれながら聞いた。
「あるとも、親父のCD250に内緒で乗ってた。免許だって大型だぞ」
頼みもしないのに免許証をみせる。祖父としたバイクの話思い出した。
ヤスシは自慢そうにエンジンをかけた。野太い排気音に車体がぶるぶると揺れる。たった今、近くのバイク屋の店先から、金だけ置いて持ちかえった。整備するから出発を一日だけ待ってくれという。
「仕事はどうするんだ？」
欠勤したことのないヤスシの弱点を探った。
「辞めるよ。早期定年退職しようと思ってたところだ」
あっさりと言って親指を立てた。まるで別人のようだった。

夜明けとともに出発した。二人乗りの赤いHondaは、まだ人気がない国道をすすると走った。巨大なカウルを持つBMWが距離を置いて付いてくる。

暑さが本格的に立ち上がらないうちに、できるだけ距離を稼いでおくつもりだった。一番近いインターで高速に乗り、本州へ向かう橋を一気に渡る。

巨大な橋の上から青々とした海を見下ろす。400CCのバイクにしがみつく人間のちっぽけさを思い知る。

このバイクは、どこにでも運んでくれる銀の羽根だ。一陣の風に乗って自由気ままに流れ漂っていく。

ヤスシのBMWは、大気を掻き分けながら追走してきた。ミノリが時々振り返って手を振っている。

タンデムシートに座る彼女も、気持ちよさそうに体を通る風を楽しんでいた。神戸を過ぎ大阪へと向かう。

順調に流れていた高速道路がしだいに混み始めた。急速に気温が上がる。アスファルトから太陽の熱が蜻蛉となって立ちのぼる。

本格的な渋滞につかまった。ぎらつく太陽がヘルメットを焦がす。車に前後を封じられて、のろのろと進んだ。風を失い、全身から滝のような汗が噴き出す。

やっと東北自動車道へ分岐した。サービスエリアに逃げ込む。

「ああ、死ぬかと思った。ポイラーの上に座ってるようなもんだ」
茹で蛸みたいな真っ赤な顔で、ヤスシがペットボトルの水を煽る。

「まったく風が来ないんだ」
鉄仮面と呼ばれるBMWの風防を叩いた。切り取る仕草をしてみせる。

「おじさん、歳のわりには結構タフじゃない」

ミノリがジャケットを脱いでタンクトップだけになる。透き通るような白い肌が、うっすらと汗ばんで光った。

出会った時から、少しづつミノリの髪の毛は短くなった。今では後ろを刈り上げたショートカットで、ピンク色の頬の少年みたいだ。しかしタンクトップの胸は、はち切れそうに上を向いて突き出し、すれ違う男の視線を釘付けにする。

「やっと体がバイクに馴染んできた。昔の勤が戻ってきたさ。おっと、別の物も出来上がってきたがね」

熱中症寸前のヤスシは、慌ててトイレへ駆け込んでいく。

「タカシ君とお父さん、あんまり似てないね。というかなんで親子？って感じ」

ミノリがぼつりと言った。

ある憶測がどこにも行き場を見つけられずにくすぶっていた。

かつて母親のことをもっと知りたいと思っただ。母が家を出た詳しい事情は誰も話そうとしない。今どこで何をしているかも知らない。高校生のときに、ヤスシに詰め寄ったが不発だった。うろたえ、ごまかし、理由を言おうとしない。やんわりとした拒絶が、さらに親子を遠ざけた。

タカシは飛び出すように、海を隔てた遠い街の大学へ入学した。最後のモラトリアムのつもりだった。卒業と同時に自立する。故郷に戻るつもりはない。

給油をすませて再び走り始めた。同時に飛び立った二台のバイクは、編隊飛行する戦闘機のようなだ。

金沢、富山を過ぎ新潟を越え、福島へ向かった。手紙を届ける相手がそこにいる。

車が減りスピードが上がる。二人乗りのタカシのHondaは、分厚い大気の壁に押し戻され喘ぎながら進んだ。

暑い。アスファルトからの照り返しと股下のエンジンの熱が、逃げ場のないライダーを襲う。ぐったりしたミノリの気配を背後に感じた。

さっきがぶ飲みした水が、みるみるうちに皮膚から熱風の中へ吸い出されていく。死にかけたカエルのようなだ。

集中力を失いかけていた。ヘルメットがぐらぐらする。酸欠の金魚みたいに口をぱくぱくした。

ヤスシのBMWがペースを上げて前に出た。ぐいぐいと加速していく。まるでついてこいと言うように、幅の広い背中を見せつけながら走る。

その時、海底から突如浮かび上がって獲物を丸飲みする鯨が現れた。一瞬何事が起こったのかわからず、タカシはパニックになった。路側帯に飛び退いた。ずおうつという轟音とともに、目前を黒い

巨体がかすめていった。

そいつは真っ黒の996型ポルシェ・ターボだった。ドラム缶半分ほどもある分厚いタイヤが、巻き上げた小石をヘルメットのシールドに叩きつけてきた。

ポルシェの大きな尻に積まれたエンジンは、腹の底から響く重低音のうなりを上げていた。みるみるBMWの背後に迫る。

ちらりとポルシェのドライバーを見やった。ヤスシは驚きも見せず、悠然と加速を始める。振り切ろうというのか、するすると速度を上げていく。

それをあざ笑うかのように、ポルシェは鼻先から一度食らいついた獲物を離そうとはしない。いまにも接触しそうな距離を走る。

タカシはしだいに引き離されて、巨大なりヤウイングを見送る。風圧が深い恐怖として残った。

ヤスシは頑として道を譲らなかった。カウリングに伏せたまま一杯の速度で進んでいく。ポルシェが走行車線に出ておもむろに抜きにかかった。

突然鞭が振り下ろされた。ポルシェがブレーキを踏みつけた。黒々としたブレーキ痕を残しながら車体をふらつかせる。接触したかに見えた。

BMWが身を挺してポルシェの進路を塞いだ。左右に車体を振りながら、かわそうとするそのことごとくを阻止する。

のろのろ運転になったポルシェの尻に追いついた。後ろでミノリが大声で何かを叫んでいる。

ヤスシがポルシェのドライバーに左腕を突き出して合図し、路側の避難エリアに誘い入れた。

バイクを止めてポルシェに歩み寄る。

ドライバーの顔が見えた。スキンヘッドにミラータイプのサングラスが光った。どう見ても凶悪なヤクザにしか見えない。

その異様に大きな爬虫類さながらの頭を持つ男は、シートに座ったままウィンドウを下ろした。ヤスシがゆっくりと近づく。手に何か赤い物を持っている。車内を覗き込んで顔を近づけ、スキンヘッドに話しかけた。

車内へ腕を差し込んだ。何かをかき回す仕草が見えた。スキンヘッドの男が悲鳴のような金切り声を上げた。ヤスシは身を引き、悠然とバイクへ引き返す。

ポルシェが慌てて道路へ戻り、タイヤを軋ませて急発進した。黒々としたスリップマークを残して逃げ去っていく。

「おじさん、大丈夫？」

ミノリが駆け寄って叫んだ。

「心配ない。あんまり行儀の悪いヤツだったから注意した」

ヤスシの右手からは、何か透明の液体が滴っている。

「リングをがちそうしてやった」

ぐしゃぐしゃに潰れたリングを、壁の向こうに放り投げる。ズボンの太股で手を拭った。

「金玉を握りつぶしてやると言ったら、慌てて逃げていったよ」
軽く鼻で笑う。

「リングなんてどこで拾ったの？」

「旅行するときは鞆の中にいつもひとつ入れておくんだよ。なんだか安心だろ？」

ヤスシの右手の握力がなぜそんなに強いのか知っている。彼はバドミントンの国体優勝者だった。

「ほんと勇氣ある。ヤクザが怖くないのね」

うっとりした表情でヤスシを見る。

「あれはヤクザじゃないよ」

「いたずらっぽい目で言った。」

「寺の坊主さ。とんでもない坊主だがね」

からからと笑い、さあ行こうとバイクに再びうち跨るのだった。

居酒屋の広いフロアは、若い客たちの喧噪と熱気で蒸せかえっていた。焼き鳥を炙る炭火の煙が充満し、効かない冷房のせいで汗が噴き出した。

運ばれてきた料理を咀嚼ももどかしく、ジョッキの生ビールで喉に押し込む。飢えたオオカミのように空腹だった。

「おじさんって喧嘩が強いの？」

串からつくねを食いちぎりながらミノリが言った。

「喧嘩なんかしたことない」

ジョッキを置くとヤスシはげっぷをした。

「あれがほんとうに凶暴なヤクザだったらどうしたの？いつもあんな無茶するの？」

少し酔っているのか、頬が薄いピンク色に染まり始めている。

「無茶なんかしていないよ」

リングを潰してスキンヘッドのズボンを、その果汁でぐしょぐしょにした右手を見せる。

「いいかい私はね、まずバイクのバックミラーで、相手がどんなヤツなのかしっかりと見たんだ。スキンヘッドにサングラス、いかつい外見だったけど、助手席に女は乗せてなかった。女の手前引くに引けなくなる状況じゃなかった。それで車を止めさせて中を覗いたら、すぐにヤクザどころか線香臭い寺の坊主だとわかった。助手席の鞆の口から紫の法衣が覗いていたからね」

空になったジョッキを高く掲げて、タカシの分までビールのお代わ

りを注文する。

「充血した目にヨダレ垂らしてるヤク中みたいなやつなら早々に退散してるさ。敵を知って戦えば、百戦危うからずってね。あんなこけおどしな輩は、事務所の仕事をこなしているうちにもう慣れっこさね」

唾を飛ばしながら喋る。

この父の何を自分は知っていたのだろうと不思議に思う。いつもそばにいながら、お互い言葉で触れ合うことを習慣として持たなかった。肉親といえども、人間は言葉を介して通じ合う動物だ。

こんな親子があるだろうか？亡くなった祖父との関係はどうだったのだろう。祖父と父は心ゆくまで話し合ったことがあったのだろうか。

「宮本武蔵だよ。生涯六十数回真剣での果たし合いをして一度も負けたことなし。もちろん負けはすなわち死を意味するんだがね。武士道とは必ず勝つこと。生き残り続けなければならぬから」

その覚悟があるか、とヤスシは急に真顔になってタカシの目を見た。「税理士事務所の仕事はそんな危ない仕事なのか？」

かつて仕事に没頭する父の姿を見ていた。夜遅く帰ってくる父親の体は、張りつめた空気で覆われている。幼いタカシは近寄ることさえできなかつた。

「中にはそういう案件もある。電卓を叩くだけじゃすまない。顧問をした会社のトラブルをすべて引き受けなきゃならん。一度引き受けた仕事は必ず命がけでやる。寝食忘れて懸命に。それをやり遂げたときの気持ちいい疲れがその代償だ。けして生きていくための金を得るだけが目的じゃない。仕事とはそういうものだ」

おまえにもそういうものを見つけて欲しいとヤスシは言った。

「私はもうアガリだ。親父も見送った」

父親と酒を飲むのははじめてだった。どんな友人と語らう時より、その言葉を真剣にのみ込んだ。

「大学はどうなんだ？面白いかな？」

旺盛な食欲を見せつけながらヤスシが言った。タカシは自分が文学部でフランス文学を専攻したこと、乱読に近い読書で文学の面白さが少しわかり始めたことなどを話した。

「文学か。いいな。私も昔小説家になるのが夢だった。それでは飯が食えないと言われて税理士になったんだ」

父にもあった青春の頃を思うと、それまで感じたことのない親近感を覚えた。

なぜ自分たちはこれまで言葉で触れ合うことをしてこなかったのだらう。優しい目をした祖父が、いつも彼らの中間にいた。父はそれに遠慮するように背中に隠れて見ていた。

無性に腹が減っていた。会話をすればするほど喉が渇き空腹が増した。ビールを飲み、焼き鳥を連鎖的に口に運ぶ。

「人間には誰だって夢がある。それだけ考えては生きていけないのは、この厄介な肉体があるからだよ」

ジョッキを煽りながら、丸太のように膨らんだ腹を叩いた。

「人間は一本の管だ。食った物を消化して排泄するだけの、によると長い一本のチューブに過ぎない。この管を維持するためだけに他のすべての臓器が付属する。貪欲で執念深い。この人間の本質が夢に生きることを邪魔する」

「欲深いミミズみたいなものね」

潤んだ目でミノリが言った。首筋まで赤く上気させ、シャワーのあのポディーソープのせいとか、肌から甘い香りが立ちのぼる。

食塊が体の芯をうねりながら通過する。タカシは咀嚼し燕下し続ける。食うことを止められなくなる。

冷え切ったビールを潤滑油にして流し込む。自分がぬるぬるの粘液にまみれた消化管そのものになった気がした。

「手紙を届ける相手は知り合いなの？」

皿に積まれた串の山をつつきながらミノリが言う。

「私は何も知らない」

ヤスシは真顔になって酔いを閉じた。

猪苗代湖近くの民宿は季節を外れた時期とはいえ、まだどこも満員だった。やっと雑魚寝の一部屋を見つけたことができた。その夜三人は、タカシを真ん中にして川の字になって寝た。

ヤスシはすぐさま鼾をかきはじめ、ミノリは背中を寄せて静かな寝息をたてた。タカシは祖父からの手紙の封を開けてみたい衝動に駆られた。しかし、眠りに落ちた二人の間に挟まれて身動きひとつできなかった。

翌朝は夏の太陽が顔を出すのを待ちわびて宿を出発した。赤いC Bのエンジンは、わずか直径4センチのシリンダーを四個せわしく上下させる。とくとくという鼓動を伝えてきた。

黒いBMWを従えて山道を行く。いくつもの有料道路を繋いで、昨夜地図で調べた目的地へ近づいていった。

しだいに山深くへ立ち入る。上りでは余裕のないエンジンも、下りのカーブが続くと口笛を吹きたくなるような軽快さに変わる。

鋭いブレーキングの後、軽々と車体を寝かしてきれいな弧を描いていく。若さに満ちあふれた鳥が空を羽ばたく気分だ。

ヤスシのBMWが大きな車体を揺らしながら追い追いついてきた。しだいにペースを上げてくる。

いくつものコーナーをクリアしていった。右に左に体が自然に動

く。路面のほんの小さなギャップやうねりを、タイヤの表面からはつきりと感じ取ることができた。前後のサスペンションが腰から生えているような錯覚に陥る。いつのまにか機械と同化していた。瞬間移動の快感に酔いしれている。

道が続く限り、どこまでも走り続けたい。バイクに乗ることで、自分の精神や肉体のある部分が解放され覚醒していく。

目的の地まで二台は一度も休まず走り続けた。太陽が目に見えない紫外線のナイフで斬り付けてくる。何かに取り憑かれた走りで一気に駆け抜けた。

突然舗装が途切れた。山の入り口に差し掛かる。エンジンを止めると、機械たちは不服そうにキンキンと音をたてた。

二台のバイクを急坂の道端に寄せる。ギアをロウに入れたまま、サイドスタンドを注意深く下ろして停車した。深い木立を割って小径が山の中へと続いている。

奥の方は曲がりくねって見通すことができない。手紙を届けるべき相手の名前と住所しかわからない。事前に電話で連絡を取ろうと試みたができなかった。

祖父から聞いた道はこれで間違いない。ヤスシのBMWが入り込めそうな道ではなかった。

歩くことにした。乾いた土を踏んで石の転がる道を進んだ。息を吐いた。木々の間を、汗を落としながらどこまでも歩いた。息

も絶え絶えになった頃、幾層にも樹木を被せた竪穴式住居が現れた。拾い集めた木材を器用に組んで、ガラス窓をはめ込んだだけの小屋ともいえない佇まいだった。三人は顔を見合わせた。

「こりやなんだ？人が住んでいるのか？」

「当然、電気もガスもないわね」

小屋の中に目を凝らした。

「でも、確かに人が暮らしているみたい。だってほら」

雨水を溜める巨大な鍋が、薪を焚く竈に乗っている。

「お風呂よ、ちょうど人が入れるもの」

裏側には調理する場所と野菜くずが見つかつた。荒れ果てた土地で野生化したトマトが、皮の固そうな赤い実をつけている。

人影はない。しおれた茄子みたいに疲れていた。木陰で休みながら待つことにした。

うとうとしかけた頃、突然茂みから獣が飛び出してきた。髭に覆われた口から剥き出す白い歯が涎で白く光る。

呆気にとられて動けずにいると、森に木霊する大声が響いた。

「ここには何も盗る物はないぞ」

髭がもしやもしやと動いた。手には小型の鉈を下げている。

飛び起きた。三人揃って後退る。ヤスシが半歩前に出て言った。
「佐竹さんですか？」

男が動きを止めた。
「名前を呼ばれるのは久しぶりだ。名前があるのを忘れるくらいだった」

小柄な老人だが、ボロ切れみたいなたんシャツから露出した腕は棍棒のように逞しい。動きも敏捷だった。男が放つ殺気に背筋がぞくりとした。

「市原です。父から手紙を預かってきました」

訪問の目的を伝えた。男は怪訝そうな顔で、ヤスシの顔を眺め回す。しばらく押し黙ったあと、口を開いた。

「カナメは死んだのか？」

表情を見せずに佐竹は聞いた。

「先月亡くなりました」

「病気か？」

「肺ガンでした」

「手紙と言ったな。見せろ」

タカシは背中中のデイパックの中から、皺になった分厚い手紙を取り出した。佐竹は目にもとまらない早さでそれをひったくり、長く伸びた爪で封を切った。

「内容を我々は存じていません」

目を上げないまま、佐竹は便箋数枚に及ぶ長い手紙を読んだ。読み進むにつれて、彼の中に生じた動揺がしだいに振幅を増していく。隆起した肩の筋肉が、小刻みに震えはじめる。

「おまえがカナメの息子か？」

深い色をした目の奥から、慈しみの心情が溢れてきた。

「私です」

ヤスシが言った。

「あなたが私の父親なのでしょうか？」

真っ直ぐに男を見返す。

「知っていたのか？」

充血した眼を見開いた。

「血液型が違いましたから。A B型の父からO型の私は生まれません」

「知ったのは最近か？」

「今回入院したときです。父は自分の血液型を隠していました。しかし、それよりずっと前から疑っていました。父に直接話を聞く機会はない、とうとうありませんでした」

「なぜ聞かなかった？」

「そうしてはいけないと思いました」

ヤスシは学生が先生に答える口調で言った。

「暑い。今年の夏はまた特別だ」

佐竹の体から攻撃的な気配がすとんと抜け落ちた。頭上から照りつける太陽は、夕暮れの時間を忘れたままだ。

「まあ、家に入ってくれ。家といえる代物ではないがね」

はめ込みと思われたドアが縦に開いた。室内は思ったより広く薄暗い。夜は皿に油を入れたランプが灯りのようだ。

「ここでもう二十年以上暮らしている。流れ流れて、ここに落ち着いた」

壁には粘土質の泥を塗ってある。床も同じだが、踏みしめられた分だけ色が黒い。部屋の中は土のにおいがした。熱を遮るせいか思ったほど暑くない。静かに時間が止まっている。

木のテーブルのまわりに、切り株の椅子が並べてある。四人はリズがお尻をつけるみたいになちよこんと座った。

「なんだかすごい。ここは秘密基地だね」

ミノリが辺りを見回しながら言った。佐竹は髭を撫でて微笑を浮かべている。俊敏な狩人の雰囲気は消えていた。

「木彫りがお仕事なの？」

奥の作業場には、大小の木彫りの像と大量の木屑の山が見えた。ノミや鉋が壁の棚に整然と並べられている。

「趣味でやっていることだ。仕事なんかじゃない。麦や野菜を作れば生きていくためには何も困らない」

自給自足の勝手気ままな生活だと笑う。

人と交わることを拒絶する暮らしだった。タカシは男の横顔を凝視した。

「あなたと父の関係を話して欲しい」

穏やかだが決意がこもっていた。佐竹はふうと吐息をついた。

「手紙の内容も教えてください」

「タカシが付け加えた。」

「こんな日が来るとは夢にも思わなかった」
煙草をくれないかと言った。ポケットから真新しいキャビン差し出した。鋭い鷹の爪のような指で一本を抜き、火をつけて肺の隅々まで深々と吸い込む。

「おお、煙草か」

細い煙を矢のように長く吹き出す。

「味も忘れてしまうところだった。なつかしい。長い時間、思い悩み苦しんできたよ。果てしない闇のトンネルをたった一人で歩き続けてきた」

浅黒い頬を撫でる。

「もういいだろう。カナメが先に逝ったが、私の時間も残り少ない」
静かに語りはじめた。

「私は人を殺した。もう五十年以上も前の話だ。私とカナメは市場を舞台にして、いろんな物を大量に仕入れて安く売る商売を始めた。うんと儲けたら、地元の愚連隊もどきが食いついてきた。ある雨の暗い晩のことだった。因縁をつけてきた男を、私は持っていた出刃包丁で刺し殺してしまった。まだ若いちんぴらだった。呆然とした。その場を逃げ出してしまったんだ。私も若かったし、こんなことで人生を奪われることが耐え難かった。カナメが私のアリバイを警察に証言してくれた。ウソをつけて逃がしてくれたんだ」

煙草をゆっくりと吸う。

「そのとき私には付き合っていた女がいた。あんたの母親だよ」

ヤスシは無言で聞いていた。

「当然その女ともそれで終わりになった。思い出すこともなかった。すべてを捨てて町を出たんだ。そのとき彼女は私の子供を身籠もっていた。たった今まで、まったく知らなかった。カナメが隠していたんだ。彼女を愛していたんだね。私から奪いたかったんだろう。結婚して自分の子供として育てたんだ。カナメとはときどき連絡を取り合ったが、なにも言わなかったよ。この十年ほどは音信不通の状態だった」

ひび割れた指をこする。

「カナメに騙されたとは思わない。不思議なほど怒りはないよ。どうせ子供を育てられるような状況ではなかった。あまりに長い時間がたった。今さら何を言われても、どうにかする気力もない。ただ、混乱している」

風船がしぼむように、佐竹の体が急に小さくなった。長い時の流れが偲ばれた。

「一人の人間の命を奪ったまま逃げたのが間違이었다。それ以来、いつも闇に脅える逃亡者として生きてきた。その報いがこれだったってわけだ」

落ち窪んだ両の眼が潤んでいた。

「今さら父親だと名乗る意味もない。カナメの意図でもないだろう。今頃私に真実を告げる理由は、あんたのためだ。手紙には、あんたが出自について疑いを持って、しだいにカナメと折り合いが悪くなっていた経緯が記されている。とうとう最後まで打ち明けられなかったと。自分が死んだあとも、あんたが知らないままなのが不憫だったのじゃないかな」

戸惑いを隠せない顔でヤスシは話を聞いていた。

「皆死んでしまった。私はここ数年、仏像を彫り続けている。あの雨の晩に人を刺し殺した感触を、いまだに思い出している。あの血のにおいが鼻の中に蘇るんだよ。裏の山に小さな祠がある。石でできた階段が百八段あるんだ。そこに私の彫った仏像が並んでいる。」

もう少しですべての段に置き終わる。何気なくやり始めたことが生き甲斐になってしまった。全部終わるまでは生きているつもりだ」

「カナメの手紙の中にあんたにあてたものが入っていた。渡して欲しいということだ」

折りたたまれ皺の寄った手紙を差し出した。祖父はいまのこの状況を予測していたのだ。

「ありがとう。今日はこれで帰ります」

佐竹は軽く頷いた。深い疲労が全身の皺から滲み出ている。

縄文時代の穴蔵のような家を出た。山道の蔭に石畳が見つかった。一人がやっと歩ける幅の階段が、遙か山上へと続く。三人は、その道をたどり始めた。佐竹がついてくる気配はなかった。

階段の足元に小さな木彫りの仏像が置かれている。一段にひとつずつ形や大きさの違うものが現れる。不揃いで無骨な像が雨に洗われ、長い時間そこに佇んできたのがわかる。

石段は心臓を破るためにつくられたにちがいない。行く先も見せずに延々と続く。

木彫りの像が無骨で荒削りのものから、同じ作者によるとは思えないほど精巧なものに変わり始める。彫り師としての佐竹の才能が、しだいに開花していく歴史がそこにある。

人を殺めた罪の意識に苛まれ、黙々と木を彫り続ける男の深い孤独を想った。茂みの中、風の届かないトンネルのような石段を上っていく。個性豊かな仏像の顔が次々に現れた。噴き出す汗をタオルで拭い、ひたすら歩みを進める。

急に周囲から蝉の鳴き声が沸き立った。ざあざあど滝の音にも聞こえる蝉時雨が耳を聳した。

仏像の置かれていない階段は、残り十段ほどだった。頂上には十坪ほどの空間があつて、赤い小さな祠が据えてある。

誰からともなく三人は手を合わせた。祠の向こうは切り立った崖で、遙か足元には靄に沈む街並みが俯瞰できた。

突然蝉の声が止んだ。突風が頬をなぶり汗を飛ばす。もやもやした何かが、耳の後ろからすうっと抜け出していった。無言のまま坂を下りた。

「先にバイクまで戻っておいてくれ」

ヤスシは一人で佐竹の小屋に足を向けた。煙草を一本吸い終わらないうちに帰ってきた。

「仏像が最後の段まで仕上がる頃に、もう一度訪問させて貰うつもりだと伝えてきた」

BMWのエンジンに火を入れヘルメットを被る。

二台のバイクが走り始める。風がシャツの隙間を抜けていく。い

くつものコーナーを、もつれ合うように駆けていく。車体を思い切り大きくバンクさせる。地面すれすれを滑走する快感に酔いしれる。むせ返るような樹木のおいが鼻腔を満たした。

うだるような暑さの中に、確実に夏の終わりの気配が混じり始めている。数日を家で過ごした。

ヤスシはバイクの整備に没頭していた。エンジンをオーバーホールし、ブレーキやタイヤを交換した。長い旅に出るらしい。

バイクが仕上がった晩に、タカシの部屋のドアがノックされた。ミノリは入浴中だった。

「オヤジが残っていた手紙をやるよ。そしてこれは俺からおまえへのメッセージでもある。一人のときに読んで欲しい」

ヤスシは封をし直した見覚えのある手紙を差し出した。佐竹が彼に手渡していたものだ。そして話し始めた。

「おまえが気づいているように、俺たちに血のつながりはない。おまえのお母さんが出て行ったのは、他に好きな男ができたからだ。相手は俺の古い友人だった。俺とは離婚して、彼と一緒にになった。しかたないと思った。それから一年もしないうちに子供が生まれた。その男の子供だった。ところが困ったことになった。離婚後十ヶ月以内に出生した子供の戸籍は、前夫の籍に入れなければならぬという法律がある。そうしないと戸籍を持たない子供になってしまうという。頼まれて俺は籍を貸した。あまり深く考えなかった。まだお母さんに未練があったのかもしれない」

ベッドに腰掛けて話を聞いた。

「その子供が誰かわかるよな？」

知りたかった真実が、語って欲しい人物の口からこぼれている。

「しかし、お母さんの新しい家庭はまたしてもうまくいかなかった。男の浮気が原因ときいた。家を出るから、おまえを一時預かってくれと頼まれた。そのとき三人でやり直そうとはつきり言えば良かったんだ。だがそうしなかった。薄っぺらい自尊心が邪魔をした。おまえが手元になれば自然にそうなるだろうという浅はかな思惑があった。行き場をなくしたお母さんは、また戻ってくるだろうと。しかし、二度とその機会はなかった」

ヤスシが息を吸い込む音が聞こえた。

「自殺してしまっただから」

「俺はおまえを自分の子供として育てる決心をした。戸籍上すでに親子だったしな」

身動きもできずに耳を傾けた。

「オヤジとまったく同じことをしたんだ。託卵ていうのかな。他人

の子供を育てる。オヤジもどう思ったろう。まさか息子が同じことを繰り返すなんてね」

自嘲気味に笑う。

「オヤジと二人でおまえを育ててきた。他人の子供だと思ったことは一度もない。いまでもそうだ」

強い光がタカシを射抜いた。

入浴を終えたミノリが戻ってきた。ほんのりと甘いシャンプーの香りが部屋に満ちた。白く滑らかな皮膚が艶やかな張りを見せている。Ｔシャツの胸が勢いよく突出していた。

「あら、おじさんいたの。長い間ありがとうございました。そろそろおいとまします」

明日タカシも大学のある街に戻るつもりだった。

「こちらこそお世話になった。忘れられない思い出になりました」
「あらたまった声でヤスシが答えた。照れくさそうな笑みを浮かべている。」

赤いホンダの後ろにミノリを乗せて出発した。家路を逆に辿る旅だった。晴れ渡る空の下、川の流れを一望できる土手の上で再びバイクを止める。ヤスシから受け取った手紙の封を切った。

『父と子である』

乱暴な文字で大きくそう書いてあった。万年筆で書かれた古いインクの文字は変色しているが、薄れてはいない。紙の上に力強く踊っている。

祖父も父もそしてタカシも、大切なことを言葉にして伝えることが最後までできなかった。自分の内にわだかまるものを、素直に会話に乗せればよかったのに。

しかし、タカシには理解できる。手紙に書かれた文字の意味が。もどかしくも蕩々と流れる愛情が、いつも自分を包み守ってきたのだと信じられる。

二度と会えなくなる前に気づいてよかった、心からそう思う。いつも一緒にいられるわけではない。しかし相手を大切に想うその気持ちには、陶器の表面に薄く塗られた釉薬のように、胸の内側を被い続ける。記憶の中にワインの澱みみたいに沈殿し続ける。家族の情とはそういうものだ。

「あたしも一度家に帰るわ。家出同然に出てきたから心配していると
思う」

ミノリのことを何一つ知らないことに気づいた。

「時々電話はしてたけどね。いったん帰ってどんな形でもいいから自立しようと思う。それができたらバイクの旅に出たい。日本中いろんな所をまわりたい」

「まず免許を取らなきゃね」

「このバイクがいい」

きらきら光る瞳で赤いCB400SFを眺めた。

「タカシ君は？」

「俺はひとまず大学に戻ってとにかく卒業しようと思う。それから考えるよ」

「また会おうね」

「うん、時間はたっぷりある」

秋の気配を含んだ涼やかな風が、川面から気持ちよく吹き上げた。

そのとき遠くの小学校のチャイムの音が、風に運ばれてかすかに聞こえてきた。それは聞き覚えのあるドボルザークの「家路」のメロデーだった。

へ了へ